The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢女性の会話に見られる協力的なスタイル
Author(s)	梅本, 仁美
Citation	大阪大学言語文化学. 2010, 19, p. 83-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高齢女性の会話に見られる協力的なスタイル*

梅本　仁美**

キーワード：高齢女性のコミュニケーション、協力的な会話スタイル、
協同して構成されるディスコース

This paper examines how women over 70 years of age in Japan converse with friends of the same sex in informal situations. The focus of the analysis lies in gaining an understanding of some of the typical conversational styles displayed during these interactions.

Since the 1970s, several research studies focusing on communication between elderly people have been conducted in Europe and the United States. However, most of the research has been restricted to "topics such as the formal elements of elderly speech, depictions of the elderly in the mass media, and their decremental loss of cognitive and physical abilities" (Taylor 1992: 493). Furthermore, these studies have not considered gender differences between the participants.

In contrast, few studies on communication between elderly people have been carried out in Japan. Nonetheless, the elderly people in Japan are generally believed to be less competent in communication compared to the younger generation. For instance, the speech of elderly people is said to be self-centered and one-sided and lacking in consideration for others. Moreover, their speech is also considered to be long-winded and repetitive.

My study focused on whether elderly people are in fact incompetent in communication. I aimed to reveal the characteristics of the interaction between elderly women in Japan by analyzing their conversations. For this study, the subjects of the investigation were women of ages ranging from 70 to 80 years. I asked each one of them to pair up with a friend so that their behavior could be somewhat natural in spite of the experimental setting.

To clarify the context in which the interactions occurred, a qualitative approach was

---

* Collaborative Style of Conversations Observed in Elderly Women (UMEMOTO Hitomi)

** 大阪国際大学留学生別科非常勤講師

chosen as the method of analysis. Further, I incorporated the key concepts of interactional sociolinguistics in analyzing the data.

During the interactions, some interesting findings were observed. Coates (1996/1997) finds two phenomena to be characteristic of the conversational speech between women friends: "jointly constructed utterances" and "overlapping speech." By using these linguistic devices, the participants in the current study constructed "a collaborative floor." Contrary to the fact that many elderly people are believed to be self-centered, the participants in the study also employed these strategies collaboratively in their conversations.

The results of the analysis clearly show that the communicative competence of Japanese elderly women is not on the decline. On the contrary, they are very competent at interacting with each other and are able to collaboratively engage in conversation.

1 はじめに [1)]

社会においてはこれまで老いや高齢者に関する事柄を取り扱うことに対する躊躇があり、これが結果として学問の研究対象としての高齢者の軽視につながってきた [2)]。これは言語を研究対象とする分野においても例外ではなく、高齢者は目に見える社会グループとして重要な意味を持ってきたわけではなかった [3)]。その中でも「実際の高齢者がどのように話し、また話しかけられているか、あるいは高齢者がどのように語られているのかといった領域はもっとも研究されていない」(Giles, Williams & Coupland 1990: 6) のがこれまでの現状である。それにもかかわらず高齢者のコミュニケーションに関する否定的な言説が一般に流布（安藤 2007: 145）している [4)]。またこれまでに行われてきた研究についても高齢者のコミュニケーション能力が若年世代の成人と比較して劣っている、あるいは加齢によって衰えているという前提に基づいてなされているものが主流であった [5)]。

そこで本稿においては、このような高齢者のコミュニケーション能力に関する一般的な見解がはたして正しいのかを検証することを目的とする。その際、60 歳以上の高齢者を、男女を問わず一律に扱ってきたこれまでの研究とは一線を画し、インフォーマン

---

1) 本稿は梅本（2009）を基にして書かれたものである。
2) 1930 年代にアメリカで生まれた老年学（Gerontology）はエイジングを研究対象とする学際的な分野であり、その研究領域は幅広い専門分野に及んでいる（工藤 2006: 9-12）が、高齢者のコミュニケーションは研究対象とされていない。
3) Coupland, Coupland & Giles（1991: 2）。
4) 現代社会における高齢者観については、古谷野（2002）に整理されている。
5) 辰巳（1997）など。

トの年齢を70歳から80歳に絞り、また女性に限定する。そしてその実際の会話データを分析することによってより詳細に会話スタイルを記述していくことにする。

2　高齢者のコミュニケーションに関する先行研究

2. 1　欧米における高齢者のコミュニケーション研究

Taylor（1992: 493）は、これまでの高齢者研究がもっぱら高齢者のスピーチにおける形式的な要素やその認知的および身体的能力の衰え、あるいはマスメディアにおいて高齢者がどのように描かれているかといったトピックに焦点を当てて行われてきたと指摘する。その中にあって、Taylor（1992）は高齢者と若い世代との実際の会話を質的に分析した数少ない研究である。インフォーマントは高齢者と大学生の共同生活プログラムに参加した大学生男女各2名、67歳と86歳の女性、97歳の男性である。この研究の目的は高齢者が若い世代との会話においてどのようにそのアイデンティティを表示しているかを明らかにするというものである。研究者によるインタビューと参与観察を分析した結果、インフォーマントの高齢者が大学生、および研究者との会話において「弱さ」(frailty）という高齢者アイデンティティを表出し、それを時には方策的に使っていることが明らかになった。

またCoupland, Coupland & Giles（1991）は、初対面の高齢女性と成人女性、高齢女性同士、および成人女性同士の会話データを量的、質的の両面から分析している。この研究のインフォーマントは70歳から87歳の女性20名、および30歳から40歳の成人女性20名から成る。この研究の分析の焦点となっているのは、高齢女性が高齢者同士および成人女性との相互行為において、年齢開示や「痛ましい打ち明け話」(painful self-disclosure）を行うことによってどのように高齢者アイデンティティを表示しているかを明らかにすることである。しかしこの研究もTaylor（1992）と同様に会話に表れた高齢者の衰えや弱さなど、否定的なアイデンティティの表出に焦点が当たっている。

2. 2　日本における高齢者のコミュニケーション研究

小野田（2007）は高齢者施設に入居している75歳から93歳の男女計10名に1対1でインタビューを行い、分析している。そしてその分析結果から、高齢者の語り口調が冗長で同じエピソードの反復が多く、また一方的に自分の話ばかりをするという施設職員からの指摘に一致する結果が出たとの結論に達している[6)]。しかしインタビューでの語りの特徴を、そのまま高齢者の一般的な話し方の特徴であるとするには無理があるだ

[6)] 野元（1982: 18-27）も、高齢者の話し方として、話し方のテンポが遅い、話が長い、人の話を聞かずに自己中心的な話し方をする、などの特徴を挙げている。

ろう。

また遠藤（2000）はパーティーに出席した40代から90代の女性、19名のスピーチを比較し、発話速度、言いよどみの頻度、指示語句、接続語句の使われ方などを分析している。その結果、高齢者のスピーチが若い世代と比較して決して劣っていないことを立証し、高齢者の話し方が冗長であるというこれまでの主張に一石を投じた。しかし分析対象があらかじめ準備のできるスピーチであることから、この結果をこのまま自然会話における話し方に適用することはできないと思われる。

このように日本においては高齢者同士の実際の会話を対象にした研究は私見の及ぶところまだない。また欧米においてはその主要な関心はもっぱら他世代が高齢者とどのようにうまくコミュニケーションを行っていくかという点にあり、高齢者自身のコミュニケーションのありようを記述しようとする研究はほとんど行われていないと言えよう。

3 理論的背景とデータ

3. 1 女性同士の会話に特徴的なスタイル

アメリカ社会における女性の従属的な地位がその言語使用に影響を与えていることを明らかにしたLakoff（1975）の研究を契機として、言語とジェンダーに関する研究が次第に行われるようになってきた。しかしこれらの多くは特定の言語形式の使い方に関する男女の違いに焦点を当てたものであり、女性同士のグループの会話データを分析してその特徴を記述している研究はほとんどなかったと言ってよい（Coates 1998: 226）。

これに対してCoates（1996/1997）は、成人男性と比較してこれまで研究対象にされることのほとんどなかった成人女性同士の自然な会話データを質的に分析し、そこに見られる会話スタイルおよび言語的特性の詳細な記述を試みたものである。その結果、インフォーマントであるイギリス人成人女性が友人同士の会話において「協同して構成される発話」(jointly constructed utterances)や「オーバーラップするスピーチ」(overlapping speech)[7]を多く用いて「協力的なフロア」(collaborative floor)[8]を作り上げ、会話を通じて互いの「関わりあい」(involvement)[9]や親密度を強めていることが明らかになった。Coatesは女性のこのような話し方のスタイルを協力的な会話スタイルのモデルであると考え、将来における人間関係のあり方を示すものとなると主張している（Coates 1996: 286）。

---

[7] Tannen（1984: 83-4）においても、このようなスピーチを協力的なオーバーラップ（cooperative overlap）と呼び、発話権を得るためのオーバーラップと区別している。

[8] Edelsky（1981）によれば、フロアの保持とは単に発言権を得ているかどうかではなく、相互行為の場面においてその場のメンバーに会話の主導権が認められていることである。

[9] 関わりあいは「個人が自分と他者、および場所、物事、活動、考え、記憶、言葉を結びつけていると感じられる内面的、さらには感情的な関係」（Tannen 1989: 12）を指す。

これまでのところ数少ない高齢者のコミュニケーション研究においてそのジェンダーに依拠する特徴について言及されているものはないと言ってよい。そしてその会話スタイルは男女を問わず自己中心的で相手の意見を聞かずに一方的に話すとされている。しかし果たして高齢女性の会話には Coates（1996/1997）で挙げられているような協力的な会話スタイルは見られないのであろうか。そこで本稿においては、女性グループのメンバーとしての高齢女性に焦点を当てて、その会話スタイルの分析を行うことにする。

3. 2　インフォーマントと分析方法

インフォーマントは関西在住の 70 代から 80 代の高齢女性 9 名[10] と 40 代女性 2 名である。会話のパートナーはインフォーマント自身が選んだ。データ収集は 2007 年 9 月から 2008 年 7 月に筆者あるいはインフォーマントの自宅で行った。データは録音して文字化し[11]、相互行為の社会言語学の枠組み（Schiffrin 1994: 97-136）に従って質的に分析した[12]。

4　分析と考察

前述の 11 名から構成された 7 組の会話データを分析した結果、Coates（1996）において成人女性の会話の特徴とされた協力的なスタイルが本研究のインフォーマントの会話においても観察された。まずもっとも顕著な例は、ある発話が複数の話し手によって完成されるものである。このような一つの発話を協同して完成させる例はほぼすべてのデータに見られた。また複数の話し手が発話を協同して作り上げる例も観察された。たとえば自身の健康法を語る A は、B と協同して「一病息災を念頭において、食事はカロリー計算をし、塩分を控え、油ものや甘いものをあまり取らないほうがいい」という発話内容を複数の発話を積み重ねて構成している。しかし 70 代の G と娘 K との知事の政策を巡る会話データでは、例外的に各自の意見の交換を重視して、協同して構成される発話が作られることはなかった。それでは以下に 2 つのデータ例を示し、具体的に検討していくことにする。

4. 1　協同して構成される発話のデータ例

［抜粋 1］女友だちとの友情（D = 71 歳，F = 70 歳，J = 40 代）

---

10) 高齢者のインフォーマントは全員、自立して介護施設ではなく自宅で暮らしている。

11) 文字化のルール　//: 発話の重なり ? : 上昇イントネーション 。: 下降イントネーション｛　｝: 非言語情報 、: ごく短い間 アンダーライン / →: 議論の中心となる発話や語句。プライバシー保護のため人名はイニシャル。（高齢女性は A から I。J、K は 40 代）

12) 相互行為の参与者の文化的、社会的背景やその相互行為が行われている文脈をも考慮して参与者同士また参与者とその発話を巡る関係を明らかにしようとする枠組み。

→18D：友だちがあるっていうのはねー // ありがたいことやわー。
19F：　　// ねー、うーん。
20J：ふーーん。
21D：ほんーまに。
→22F：だからね、そら、ほんとにあの、やさしいあったかい交流をね、したいな // と思いますね、年取ってくると余計にねー。
23D：// うんうんうんうん。
24F：う // ーん。
25D：　// うーん。
26J：うーん。
→27D：もうあの若い時はそれなりに、こう、人がうらやましかった // り
→28F：　　// そうそうそう // そう。
29D：// ね？おんなじ仲良か // っても //
30F：　　// うーん。
31J：　　// あー。
→32F：女性は特に // ね。
→33D：　　// であるけどね、でだんだんそういうもんがなくな // ってきてね。
34J：　　// あー。
→35F：　　// そうそうそうそう。
36F：うんうん。
→37D：お互いに弱いとこを //
→38F：　　// うんうん。
→39D：も // うなんかみなね、弱いままに、もう角が取れ // るというかねー。
→40F：　// もうなんかねー、はが、励ましてあげたり
→41F：　　// 聞いてあげたりと
→42F：そうそうそう // そう。
→43J：　　// うーーん。
→44F：ほんとそう、もう同窓会しても // ね、そうですよ。
45D：　　// うんうん。
→46D：いやこの人変わった // なあ // って言う人多いよね？
→47F：　　// ほんとうにそう、そうね。

48J：　　//あー。

49J：ふーーん。

→50F：そうそうそうそう。

→51F：やっぱ年ですね。

52D：うーん。

→53D：ほんとそうや、年取ったらほんとそういう風にか、変化していくこともあるよね？

自分のこれまでの交友関係をふりかえって語るFに対して、Dは「友だちがいるということはありがたいことだ」というコメントを述べる。この発話18DによってFが導入した話題に対するDとJの「関わりあい」が深まり、Fがさらにその話題について話し続けることが可能になる。したがってこれはDのFに対するポジティヴ・ポライトネスの表れと考えられる[13]。この発話を受けてFは「だから年を取ってくると余計に友人と温かい交流をしたいと思う」(22F) と自分の気持ちを述べる。Dはこれを発展させ27Dの発話で新たな話題を導入する。この27Dから39Dに至る発話で、若い時は親しい友人であっても競争心を持つことがあったが年を取るにつれてそういう気持ちがなくなってきたとDは語る。これに対してFはDの発話内容を支持し、積極的にあいづちを打ったり発話を補足したり (32F) して、Dの発話を促進している。DとFの発話には何度も重なりが見られ、一見、Fがフロアを取ろうとしているようにも見える。しかし32Fでもわかるように、Fの発話が長く続いてDを遮ることはなくDもまたそのまま自分の発話を続けている。一方若いJは、DとFが協同して構成する発話の容認された聞き手[14]として最小限のあいづちを打っている。33Dで友情に対する心境の変化について述べたDは続く37Dの発話で「年を取るにつれて、お互いの弱いところをそのまま受け入れられるようになる」と伝えようとする。これに対してFはあいづちを打つが、Dと協同してその発話を完成させることはなかった。そこでDは39Dの冒頭でDは「もうなんかみなねー」と切り出し、さらに「弱いままに……」と先の発話を続けるが、ここでも発話は完結していない。これはFが自分の発話意図を理解していると考えたDが、Fによって発話が完成されることを予測して完結しない発話を行ったと考えられる[15]。そこでDの意図を察知したFは、Dの発話内容を予測してその発

---

[13] Brown & Levinson (1987) は、相互行為における話し手の、聞き手のフェイス（他人に対して求める自己の評価）に配慮する気配りのシステムをポライトネスと名づけ、相手のポジティヴ・フェイスを守るためのストラテジーをポジティヴ・ポライトネス、ネガティヴ・フェイスを守るためのストラテジーをネガティヴ・ポライトネスとした。

[14] 相互行為の社会言語学では、聞き手としての立場を呼びかけられた聞き手、呼びかけられない聞き手、容認された聞き手、容認されない聞き手に細分化している。

[15] これは誰かによって遮られたのではなく、自ら発話を中断した「完結しない発話」(Coates 1997: 60) である。

話を協同して完成させるべく、ほぼ同時に重なるように「もうなんかねー」と繰り返している[16]。ところが40Fと39Dを比較してみるとその発話内容は微妙に異なっている。これは37Dの「弱いとこ」に対する解釈のずれが原因だろう。Dが「弱いとこ」をいわば欠点や弱点という意味で用いているのに対し、Fはそれを悩み事や心配事を意味していると解釈し「励ましてあげたり」(40F) や「聞いてあげたり」(41F) という発話を行うのである。ここでの2人の発話は語句レベルでは正確には同じではないが「年齢を経て女性の友情のあり方が変化する」という主張が一致している点からみて、Coates (1996) で主張された「多声的なトーク」(polyphonic talk) [17] と言えるだろう。39Dと40Fの発話内容は完全に重複することはないが、まるでジャズ演奏のジャムセッションのように互いに重なり合い、補強し合ってハーモニーを生んでいる[18]。そして42Fの「そうそうそう」がDに対する強い共感を表し、一連の流れの締めくくりを示している。

次にFは発話44Fで同窓会という小話題を導入する。これはこれまでの年をとってからの女性の友情の変化という話題を踏まえたものである。このFの発話の「同窓会(に)してもそうだ」というのは具体的に何を指しているのかが明らかではない。しかしDはこれを同窓会が人の(性格の)変化を実感する場であると解釈する。そして46Dで「昔と印象が変わった同窓生と会うことが多い」という発話をする。これに対してFはDの発話内容を積極的に支持するあいづちを打ち、最後に「やっぱ年ですね」(F51) と締めくくる。これに同感したDは、発話D53でFに同意を求めている。

このように一連の会話の流れにおいてDとFは話し手の立場を分担していたが[19]、アニメーターとオーサーはその時々で替わるものの、ほぼすべての発話のプリンシパルはDとFがともに担っていたと言えるだろう。この抜粋では、3人の親密度に差があるためか40代のJが一貫して呼びかけられた聞き手および容認された聞き手の立場を維持し、70代のDとFが積極的に話し手の立場を分担しあって、協同して発話を構成したり相手の発話を促進するようなあいづちを打っていたことがわかった。この抜粋では当初Fの個人的な話題であった女同士の友情に関する話題がDのコメントをきっかけに参与者に共通の話題へと発展し、DとFの多声的なトークによって複雑な進行をしながらも協同して発話が構成されていく協力的な会話スタイルが観察された。

---

16) 繰り返しには相手への関わりあいを強める機能があるという (Tannen 1989: 59-70)。
17) 多声的なトークとは「2つあるいはそれ以上の異なってはいるが互いに補強しあうものごとが同時に話される」(Coates 1996: 69) 複数の発話を指す。
18) Coates (1996: 117-18) は、女性の友人同士のこのような会話を複数の旋律が同時に演奏されるジャズにたとえている。
19) 相互行為の社会言語学の枠組みでは、話し手としての立場をアニメーター (ある発話の発声体)、オーサー (その発話によって表現される感情、および言葉を選択する人物)、プリンシパル (その話された内容によって自らの立場が確立され、信条が語られ、その内容に責任を持つ人物) に細分化している。そしてさらにその場で語られる話題で描写される登場人物をフィギュアと呼ぶ (Goffman 1981: 144-145)。

以下に挙げる［抜粋 2］においても、当初は微妙に異なっていた発話内容が、参与者同士が協力して会話を進めていくにしたがって 1 つにまとまっていく様子が見られる。

4. 2　協同して構成されるディスコースのデータ例

［抜粋 2］社会に向けての主張（H = 79 歳，G = 73 歳）

→01H：でもね、今ね、よく思う、// 私らあの、こっち来て。

02G：　　// (……)

03H：初めて 4 年生の時に家庭教育学級入ったね？

04G：うーん。

05H：あったでしょ？

06G：うーん。

→07H：そういうのがあったらね、もう心、もう言いたい、私言いたい。

08G：ねえ // ー。

→09H：　// ほいでね、テレビでもね、いろんなことゆってるけど、甘い。

10G：そうね // え。

11H：　// ね、評論家でも甘い // し

12G：　　// ね、甘いね、全部 // ね。

13H：　　// ね？ ね？ なんかすごいね // (……)

→14G：　// 私らに言わせば // ね。

15H：　　// 育った環境からで、私らで物申したくなる。

16H：物申したい、こういう場所があったら // ね。

17G：　　// まだね、私時々ふっと思うの。

18G：も、この頃ね // いわゆるコメンテーナーちゅうような人たちは全部もう、若い人になってるでしょう？ 50 代 60 代は。

19H：　　// うんうん。

20G：たとえば、ね？S さんにしても 60 だからね？

21G：そしたら、やっぱり私たちの世代はもなくなってきたでしょう？全部。

22H：そうねー。

23G：ね？

24H：うん。

25G：だからほんら、本来は世代別にしてほしいよね？

26H：いやー、私ね // あれ出てる人なんかでもね // 言うてること軽いよ。

27G：　　//私思う時ある。
28G：　　//うん。
29G：ね、そいで男の世代でも50代40代でしょ？//
30H：　　//うん、男の人でも//
31G：　　//だから、
ほんとはね、80代の人//90代の人//私が//プロデューサーならそうしたい。
32H：　　//そう。
33H：　　//そう。
34H：　　//そうやね。
35H：そうしたいね。
36G：うん。
37H：で、年代によっての//こう
38G：　　//そう、そうすると//あの一視聴者は納得するじゃない。
39H：　　//うん。
40H：うん納得する。
41H：いや私、それずっとね、あの一ほんとに見てて思うね。
42G：ねえ。
43H：話せる場所あったら喋りたい。
（中略）
75H：私らまだね、そのエネルギー残って//る。
76G：　　//そうな//のよ。
77H：　　//しゃべりたい。
78G：そうなんよ。

2人は小学校のPTA活動を通じて知り合った。Hは自分に発言をする場所が与えられるならば昨今の社会問題について意見を述べたいと考え、2人が昔ともに参加した家庭教育学級[20]を発言の場の具体例としてまず示す。そして発話07Hにおいてようやく自分の意見をGに伝える。この主張は発話15H、および16Hで繰り返される。これらの繰り返しはGに対して強く自分の意見を印象づけるためになされたものである。そしてまたHは自らの主張を補強するために発話09H、11Hでテレビのコメンテーターに対する批判を行っている。Hの一連の発話を受けてGもまた自らの意見を披露する。

[20] 家庭教育学級とはPTA活動の一環で、父母の知識や教養を高めるために行われる勉強会や座談会、講演会などを指す。

この形式もHと同様でまず発話17Gでこれからの発話で自分の思いを述べることをまずHに告知する。そして18G、20G、21GでHに同意を求めながらテレビのコメンテーターの若さを指摘している。これは続く発話25G、31Gにおいて自らの主張を述べる前にHと前提となる知識を共有したいとのねらいでなされた発話であろう。18G、20G、21G、23Gの上昇イントネーションはHへの働きかけの強さを表すものである[21]。これは自分自身が関心を持っている話題に対してHも関心を持ってほしいというポジティヴ・ポライトネスの表れであろう。

一方Hは自らが発話09H、11Hで導入した、テレビのコメンテーターの意見が甘いという小話題をGがさらに発展させていることに同意を示している。しかし本来Hが主張したかったのは社会問題に対して意見を述べる場所があったら発言したいということであった。この時点においてはHとGの主張は微妙に食い違っているが、2人は決してフロアを取るために競ってはいない。フロアを取るためになされた発話26Hには次のGの発話が重なり、Hが導入しようとした話題は採用されずにさらに発話29Gへと続いていく。これに対してHはGの協力的な聞き手としてその発話内容を支持し、積極的にあいづちを打っている。29Gの問いかけに対して30Hでは同意を表す「男の人でも」という語を繰り返し、また発話31Gで出されたGのテレビ局に対する要望にはあいづちを打ち、35Hでは31Gの最後の部分を繰り返して「そうしたいね」と同意している。この発話35Hにおいて当初Gの個人的な意見であったテレビ番組のコメンテーターを世代別にして自分たちと同世代の人の意見も取り上げるという案がGとH双方に共有されるものとなっている。そしてこの話題を発展させるべく発話37Hを行うが、ここでもまたオーバーラップが起こる。そのため発話39H、40HとHはあいづちを打つ役割に徹している。このようにHが二度もフロアを取ることができなかったことからHとGの間にパワーの差があるという見方もできる。しかしこれは2人のいわばマシンガントークのような会話スタイル[22]に由来すると考えた方がいいだろう。Hは自分がフロアを取る機会がないことを気にする様子もなく積極的に会話に参与し、Gの発話を支持するあいづちを打っていた。

続いてHは「いや私、それずっとね、あのーほんとに見てて思うね」(41H) と発言する。この発話内容は明確ではなく2通りの解釈が可能だろう。その理由は指示代名詞「それ」が何を指しているのかがあいまいだからである。まず考えられるのはこれまで

---

[21] Lakoff (1975) は上昇イントネーションが女性の自信のなさを表すものであると主張している。しかし筆者はむしろこれを相手への強い働きかけを示すものであると考える。

[22] 相手の発話にオーバーラップするスピードのある発話は、一見、相手の発話を遮っているように見えるが、これは相手やその話題に対する関心の強さから行われているもので、ニューヨークのユダヤ人に特徴的とされるスタイルである (Tannen 1984: 52-3)。

のGの発話内容をすべてまとめて指示しているという解釈である。G自身もそのように受け取ったことから「ねえ」(42G) という念を押すような応答をしたのだろう。後半の「見てて思うね」という表現からも、Hがテレビを見ていて感じたことであることが示されていることからこのように受け取る方が自然だろう。しかしその直後の発話でHは「話せる場所あったら喋りたい」(43H) と述べている。これは発話15H、16HでHが語った内容の繰り返しである。そうなると、発話41Hの「それ」は直後の発話43H全体を指す後方照応であると考えることもできる。当初のHの主張は「社会問題について語るべき場所が与えられるならば自分がそれについて思うところを述べたい」というものであった。一方Gは「自分たちと同世代の意見が反映されるように80代、90代のコメンテーターも選ぶべきだ」と考えている。ともに思うところはあるものの、その主張は正確には一致していない。Hは当初持論を展開しGの支持を求めたが、その後Gの主張を積極的に支持しあいづちを打っている。このことから考えると発話41Hの「それ」はHとG主張両方を指示し、さらにはこれまでのコンテクストすべてを指していると解釈するのが自然ではないだろうか。Hはこの発話によって自分自身とGの主張を融合させ、双方の主張を支持することによって互いのフェイスに配慮している。「私らまだね、そのエネルギー残ってる」(75H) と話すHに対してGは強く同意する。しかしこの場合の「その」も先ほどと同様に何を指示しているのかが明確ではない。Hは発話77Hで簡潔に「しゃべりたい」と本来のHの要望を述べるがこれに対してもGは「そうなんよ」と同意する。

頻発する痛ましい事件を巡って、「語るべき場所が与えられるならば、自分がそれについて思うところを述べたい」とするHの主張と「さまざまな場面で自分たちと同世代の意見を反映させるべきだ」とするGの主張は正確には同じではない。しかし2人は互いに相手の主張に同意し、同時にまた自分自身の主張をそれに関連づけて提示するというスタイルを取り、最終的にはそのどちらをも受け入れ、協同してひとつのディスコースを作り上げている。このデータでは同世代の共有知識をもとにディスコースレベルで協力的な相互行為を行い、親密度を高めるラポール・トーク[23]を行っている様子が観察された。

5　まとめ

これまでに行われてきた高齢者のコミュニケーションに関する研究は、その否定的な

[23] 女性同士の会話に典型的であるとされる親密度を高めることを目的にした会話。これに対して情報の交換を主たる目的とする会話はレポート・トークと呼ばれ、男性に典型的であるとされる (Tannen 1984: 147-9)。

面ばかりが強調されてきた。またインフォーマントとなる高齢者の定義も厳密にはされず60代から90代までを一律に扱い、そのジェンダーの違いに着目することもなかった。そこで本研究においてはインフォーマントの年齢とジェンダーを限定し、高齢女性を女性グループの下位グループとして位置づけ、その会話スタイルの特徴を明らかにしようと試みた。

分析の結果、高齢女性の会話においても参与者がCoates（1996）によって指摘された繰り返し、オーバーラップするスピーチ、協同して構成される発話などのストラテジーを用いて協力的に会話に関わっていこうとする様子が明らかになった。つまり高齢女性もまた親しい友人同士との会話においては、40代、50代の成人女性と同様に協力的な会話スタイルを取っていることがわかった。「女性」というジェンダーグループに属していた人間がある年代を境に突然、同世代の男性と同じグループにまとめて入れられてしまうのは不自然なことである。しかし現在のところ、少なくとも社会言語学、老年学などの研究分野においては、高齢女性について取り上げる場合にはジェンダーよりも年齢に焦点が当たっているようである。もちろん高齢女性がそれより若い世代の女性には見られない特性を有しているであろうことは否定しない。しかし本研究はデータ数が7組と限定的ではあるものの、これまでに先行研究で指摘されてきた高齢者の「自己中心的で一方的な」会話スタイルとは対照的な協力的なスタイルが見られたことは注目すべきであろう。このような協力的な会話スタイルが観察された背景には、インフォーマントが友人同士で互いに知識や価値観を共有し、その場の相互行為を互いの親密度を高めるためのものであると解釈して、ラポール・トークを行っていたことがあると考えられる。今後の課題としては、今回取り上げなかった高齢男性が、成人男性の会話の特徴であるとされる、情報の交換を重視したレポート・トークを行っているのか、あるいは公の場から退くことによって、女性の友人同士の会話スタイルに近づいているのかについても分析する必要があるだろう。

参考文献

安藤孝敏「社会性・コミュニケーションのエイジング」谷口幸一・佐藤眞一（編著）『エイジング心理学』北大路書房、2007年、pp. 141-157。

Brown, P. & S. C. Levinson. 1987. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Coates, J. 1996. *Women Talk*. Oxford: Blackwell.

Coates, J. 1997. The Construction of a Collaborative Floor in Womens' Friendly Talk. In Givón, T. (ed.). *Conversation: Cognitive,Communicative and Social Perspectives*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co. 55-90.

Coupland, N., J. Coupland & H. Giles. 1991. *Language, Society and the Elderly.* Oxford: Blackwell.

Edelsky, C. 1981. Who's Got the Floor? *Language in Society* 10: 383-421.

遠藤織枝「高齢者の話し方は遅くてわかりにくいか」『ことば』20、2000年、pp. 83-94.

Giles, H. A. Williams & N. Coupland. 1990. Communication, Health and the eldery: frameworks, agenda and a model. In Giles, H., N. Coupland & J. M. Wiemann. (eds.). *Communication, Health and the Elderly.* 1-28.

Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

古谷野亘「現代日本の高齢者観」『老年精神医学雑誌』13（8)、2002年、pp. 877-82。

工藤由貴子『老年学』角川書店、2006年。

Lakoff, R. 1975. *Language and Women's Place*. New York: Harper & Row. （あきば・れいのるず・かつえ（訳）『言語と性』有信堂、1985年。）

野元菊雄「老人のことば概観」『言語生活』369、1982年、pp. 18-27。

小野田貴夫「高齢者の話す内容・話し方の特徴について」『社会言語科学会第19回大会発表論文集』2007年、pp. 62-65。

Schiffrin, D. 1994. *Approaches to Discourse*. Oxford: Blackwell.

Tannen, D. 1984. *Conversational Style*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.

Tannen, D. 1989. *Talking Voices*. Cambridge: Cambridge University Press.

辰巳格「加齢現象としての喚語困難」『言語』26（13)、1997年、pp. 26-33。

Taylor, B. C. 1992. Elderly Identity in Conversation Producing Frailty. *Communication Research*. 19 (4): 493-515.

梅本仁美『高齢女性のコミュニケーションに関する研究－会話データに見られるグループ・アイデンティティの分析を中心に－』大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文、2009年。